

展示室を飛び出した「懷徳堂」——大阪大学懷徳堂センターの活動——

湯浅邦弘

はじめに

平成十四年（二〇〇二）三月、懷徳堂センターは本格的な活動を開始した。文学研究科本館四階、（財）懷徳堂記念会事務局に隣接する約三十㎡の展示室において、懷徳堂や文学研究科関係資料の「展示室」情報資産管理センター」としての役割を果たしている。

主な活動の第一は、懷徳堂文庫資料を中心とする常設展示である。総点数五万点に及ぶ懷徳堂文庫資料は、現在、大阪大学附属図書館新館の貴重図書室に収蔵されているが、本センターでは、これら貴重資料のパネル、タペストリー、レプリカを展示するほか、「バーチャル懷徳堂」「懷徳堂文庫電子図書目録」「電子懷徳堂考」などの電子展示を行っている。この内、現在保有している貴重資料パネル（縦×横各七十㎝）は、次の二十四枚である（口絵参照）。

「懷徳堂幅」

「中井竹山肖像画」

「宋六君子図（邵子・周子・張子・程伯子・程叔子・司馬子）」

「入徳門聯」

「懷徳堂瓦当拓本」

「紙製深衣」

「旧懷徳堂平面図」

「中井履軒肖像画」

「天図（木製・紙製）」

「潮図」

「方図」

「越俎弄筆」

「聖賢廟」

「北極至赤道圏中分一半見界總星図（履軒「天体図解」のうち）」

「南極至赤道圏中分一半見界總星図（履軒「天体図解」のうち）」

「華胥国門額」

「華胥国物語版木」

「華胥国物語」

本センターは、水曜日を除く平日に開放しており、これまで、学内の教職員・学生はもとより、オープンキャンパス・文学部見学会の際に訪れた高校生、国内の研究者、図書館・資料館関係者、海外（中国・韓国）の研究者、

教育評価・学位授与機構委員などの見学や視察があり、センターの専門委員や非常勤職員がその都度説明を行っている。また、平成十四年(二〇〇二)三月には、特別展「須田国太郎 能・狂言アッサン展」が行われた(この詳細については、本誌掲載の関係論考参照)。

さらに、本センターの活動の特色としては、学内外へのイベントへの参加や出張展示・解説が挙げられよう。平成十四年(二〇〇二)三月以降での、そうした活動としては、SEMBA博(船場博)(平成十四年三月)、大阪大学いちよう祭(平成十四年四月、平成十五年四月)、大阪大学総合芸術博物館設立記念展(平成十四年十月)、扇町総合高等学校での授業(同十一月)、懐徳堂秋季講座(同十一月)、大阪大学文学部・文学研究科同窓会(平成十五年五月)、大阪大学総合芸術博物館第二回企画展(平成十五年十月)、懐徳堂アーカイブ講座(平成十五年十一月)などへの出展がある。

これらの概要については、本センターHP(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitoku/>)でも簡単な紹介をしているが、本稿では、この内の船場博、扇町総合高等学校での授業、大阪大学総合芸術博物館設立記念展について詳細な報告を行いたい。

一、SEMBA博2002

平成十四年(二〇〇二)三月十六日、大阪船場の街おこしイベント「SEMBA博2002」(船場博実行委員会主催)が開催された。「船場と人とビジネスの新しい出会い」(船場を知る。船場を考える。船場で交流する)と題し、大阪府中央区本町の大阪産業会館を会場に関係機関・団体・企業などが様々な工夫を凝らした展示を行った。

大阪大学大学院文学研究科では、(財)懐徳堂記念会との共同出展として、

「適塾・懐徳堂ブース」を設営し、懐徳堂について次のような展示を行った。

・貴重資料パネル「懐徳堂幅」・中井竹山像「木製天図」・旧懐徳堂平面図」の計四枚

・懐徳堂CGタペストリー「玄関部」・講堂内部」の計二枚

・三十二インチ大型液晶モニターによる「バーチャル懐徳堂(懐徳堂CG)」・懐徳堂データベース」

・二十一インチモニターによる「懐徳堂文庫電子図書目録」

この展示を担当したのは、懐徳堂センターの専門委員である筆者、および(財)懐徳堂記念会事務局主事田辺敏子氏である。また、展示解説の協力をお願いしたのは、懐徳堂デジタルコンテンツの制作に御協力いただいている凸版印刷株式会社の高橋孝輔・森田教子の両氏、大阪大学関係者の佐野大介氏、大村由紀子氏の両名である。

これは、懐徳堂デジタルコンテンツが懐徳堂センターを飛び出した最初のケースとなった。当日の来場者は、非公式ではあるが、主催者側の概算では、千七百名とのことであった。

この展示については、後日、担当者および協力者による反省会が行われ、それをとりまとめた自己評価は次の通りである。

(一)事前準備段階

〈よかったと思われた点〉

・主催者側から提供された会場図面に基づき、ブースのレイアウト図面を予め作成した。これにより、ある程度ブースイメージを持つことができた。

〈改善すべきと思われた点〉

- ・ 設営や展示の担当者による現場の事前確認がやはり必要であった。コンセントの位置・数、パネルを掲げるフックの状況など、詳細情報等については事前に会場で確認しておく方が良かった。

(二) イベント当日

〈よかったと思われた点〉

- ・ 「懷徳堂」を目的としない来場者に対しても、興味・関心を喚起することができた。

- ・ 他のブースと比較しても、視覚的な演出効果が大きかった。

- ・ 「バーチャル懷徳堂」による体験コーナーを設けるなど、参加型の展示を実現できた。

- ・ 「懷徳堂物語」(バーチャル懷徳堂に登載されている影絵と音声による懷徳堂創立の物語)をプレゼンテーションすることによって、効果的な導入となった。映像・音声系コンテンツはインパクトが大きい。

- ・ 落ち着いた知的な雰囲気となごやかさが同居したブースの印象であった。

- ・ イベントそのものの「アーカイブ活動(ビデオ・デジカメによる記録)」ができた。

- ・ 大阪大学出版会の書籍販売との連動ができた。

- ・ 懷徳堂記念会「懷徳堂絵葉書」プレゼントによって、コミュニケーションのきっかけ作りができた。

〈改善すべきと思われた点〉

- ・ パンフレットなど各種ツールの配置や設置方法の工夫。もう少し目付きやすく取りやすい方法を検討すべきであった。

- ・ ブースへの来場者の意見、感想を吸い上げる仕組みが必要。アンケートの実施、感想ノートなどの準備によって、そこから得られた情報をもとに、来場者を次のステップへつなげることが出来る。

- ・ 「懷徳堂」と「適塾」における展示バランスをとる。今回は、適塾の担当者は参加せず、懷徳堂ブースが適塾関係パネルも併設するという内容であったが、今後は「適塾」との関係にも留意すべきである。

- ・ 現状の「懷徳堂データベース」には必ず説明員が必要であるが、「興味がある」という程度の来場者には少しハードルが高いため、「懷徳堂物語」などの他にも、入門者向けツールを開発する必要がある。

- ・ 現状の「懷徳堂データベース」においても、研究者のみではなく、一般の「生活や関心事に密接に関連した項目からの検索」を実現するユーザインタフェースの工夫ができると思われる。この点については、コンテンツのインターネット公開時にも再検討を要する。

- ・ 「過去の懷徳堂」を振り返るばかりではなく、現在の活動状況や運営の窮状などを訴えることも必要である。

(三) 来場者との対応で知り得た情報

- ・ 「重建懷徳堂」関係者との新たな出会いと発見があった。

- ・ 扇町総合高等学校教諭から、「懷徳堂関連講義」の依頼があった。展示からそのような内容を感じていただくことができた。この授業の詳細については本稿の次章参照。

- ・ 近接ブースで展示されていた「心学明誠舎」など、大阪の学塾との連携、ネットワーク化によるアピールの可能性を感じることができた。将来、大阪学塾シンポジウム・フォーラムなどが実現できれば、新たな可能性が広がるかもしれない。

(四)その他の感想など

- ・適塾と懷徳堂の名前だけは知っていても、それらと大阪大学あるいは大阪大学文学研究科との関係について充分認識されていないことが分かった。
- ・適塾記念会・懷徳堂記念会は、時には、共催の形で事業を展開し、大阪大学との関係をアピールする必要がある。
- ・その際には、大阪大学創立七十周年記念事業で制作したデジタルコンテンツが有効に活用できる。
- ・年配の方は昔を懐かしみ、若い層は感心し、子どもたちは「バーチャル懷徳堂」で楽しんでいたように感じられた。
- ・六十代以上の方々は第二次世界大戦時の思い出と共に懷徳堂について語られていた。大阪空襲の話を変えながら適塾・懷徳堂について語られた方もおられた。
- ・今回のイベントの成果を、できるだけ早く内外に媒体を通じてアピールすべきだと感じた。
- ・広報活動に活用できるような安価な懷徳堂GOODSを制作する必要があると感じた。

二、扇町総合高等学校での授業

右の船場博の当日、ある方との出会いがあった。大阪市立扇町総合高等学校の沼野紀代子教諭である。沼野先生は、懷徳堂の展示資料の内、特にデジタルコンテンツに興味を示され、これらを使用した授業を扇町総合高校で実践していただけないかと遠慮がちに話された。高校生を対象とする授業については、あまり経験がなく、こちらためらいがちであっ

たが、お引受けする旨お伝えした。

その後、同校との打ち合わせを経て、平成十四年(二〇〇二)十一月一日、大阪市立扇町総合高等学校において、懷徳堂データベース、懷徳堂関係ホームページを活用した授業「大阪学・懷徳堂」を行うこととなった。総合科目「大阪文化系列」の一環として開講されたもので、二コマ連続の授業を二年生三十八名(男子十二名、女子二十六名)が受講した。以下、その概要について報告する。

授業目的

- ①大阪学術の源流「適塾」「懷徳堂」成立の社会背景、特色などの概要を講義する。
- ②大坂町人と懷徳堂との関係などに見られる、大阪文化と教育との関係について解説する。
- ③マルチメディア技術による適塾・懷徳堂の顕彰について紹介する。
- ④インターネットを活用した懷徳堂情報収集の方法について実習する。

時間

一時間目 …… 十三時十五分～十四時五分
二時間目 …… 十四時十五分～十五時五分

内容

一時間目(普通教室)

- ①自己紹介と授業概要の説明
- ②適塾……緒方洪庵の身「適適齋」の意味についての説明

③ 懐徳堂……堂名「懐徳」の意味についての説明、および懐徳堂成立の背景と特色についての説明

④ 懐徳堂デジタルコンテンツの紹介……大阪大学創立七十周年記念「知の光彩」(DVD版)の上映。

二時間目(情報教室)

① 各端末からインターネットにより「懐徳堂」を検索。

② 「懐徳堂記念会HP」により、懐徳堂の歴史・重要人物の確認

③ 大阪大学附属図書館HPの「電子展示で見る懐徳堂」により、「懐徳堂幅」「入徳門聯」「宝暦八年定」「旧懐徳堂平面図」「木製天図」「越俎弄筆」「重建懐徳堂」を解説。

右のように、一時間目は、筆者(授業者)が懐徳堂の歴史や意義について、適塾や現在の大阪大学との関係にも触れながら概説し、また、大阪大学創立七十周年記念事業として公開された「知の光彩・未来へ」を上映した。

休憩を挟んで二時間目は同校の情報教室に場所を移し、インターネットを活用した授業を試みた。この教室は、全員に端末が配備された優れた環境にあり、まずは、サーチエンジンによって「懐徳堂」をキーワードとして検索、トップに表示された「懐徳堂記念会」のホームページにアクセスさせた。このページによって、懐徳堂の歴史や重要人物の解説を閲覧した後、懐徳堂記念会による現在の活動状況についても確認させた。

次に、大阪大学附属図書館ホームページの「電子展示」のコーナーに移り、懐徳堂の貴重資料、『論孟首章講義』『天図』『越俎弄筆』などを閲覧させた。これらの資料は一時間目に概説したもので、それをホームページの画像によって確認させることで、一層の興味を持たせることができ

た。

この授業に関しては、大学の通常の講義とは異なる授業形態のため、筆者(授業者)にとっても収穫が多かった反面、いくつかの課題も残った。以下にそれらをまとめる。

・一時間目の授業では、同校のDVDプレーヤーとこちらが用意したDVD-ROMとの相性が悪く、投影に手間取った。機器の操作については、同校の情報担当の先生と何度も電話で打ち合わせをしたが、やはり、授業前に機器の確認をする必要があった。

・二時間目の授業では、パソコンの習熟度の違いにより、操作に遅速が生じた。そのため、全員が同一画面を展開するまでに少し時間を要し、操作の早い生徒は、解説を聞く前に次の画面へと操作を進めてしまうという問題があった。この点については、授業中、同校の先生二名の協力を得て、机間巡視を行い、操作に手間取る生徒を支援したが、なお不十分であった。こうした授業については、いわゆるTAの活用が不可欠であると感じられた。

・画面を閲覧しつつ、要点をノートしている生徒もいたが、ほとんどの生徒は、画像を閲覧することに興味が集中し、記録をとることをしていなかった。この点については、予め「書き込みシート」などを授業者側が準備し、適宜、要点を書き取らせるような工夫が必要であると感じた。

・懐徳堂記念会HPの「お問い合わせ」意見・感想」の「送信フォーム」を使って、授業の感想をEメール送信してもらおう計画を立てていたが、同校のセキュリティの問題から、送信は認めていないとのことである。しなかった。インターネット環境についても、予め充分確認をしておく必要を感じた。

三、大阪大学総合学術博物館設立記念展

前記の船場博では、かつて懷徳堂が位置した「船場」での開催であったため、来場者の懷徳堂の認知度は比較的高いと感じられた。しかし一方では、先の反省点にある通り、その懷徳堂と適塾、あるいは懷徳堂と大阪大学との関係については、ほとんど理解が及んでいないという実感を得た。適塾と懷徳堂とを二つの源流と位置づける大阪大学にとって、これは重大な問題である。しかし、そうした観点から高く評価できる試みが開催された。大阪大学総合学術博物館設立記念展がそれである。

平成十四年(二〇〇二)十月十二日～二十日、大阪大学総合学術博物館の設立記念展が大阪歴史博物館・NHK大阪アトリウムで開催された。

この記念展では、学内公募による研究成果を大阪放送会館一階アトリウムに特設した各ブースで公開したが、懷徳堂は大阪大学の源流として特に重視され、大阪放送会館一階アトリウムと大阪歴史博物館二階展示室において、同時に懷徳堂関係の展示解説が行われることとなったのである。

「バーチャル懷徳堂」(大阪放送会館一階アトリウム)

まずアトリウムでは、「いま大阪で何が?—人間・地球・物質」と題した特別展の中央ブースに、「バーチャル懷徳堂」を出展した。

これは、平成十三年(二〇〇一)に創立七十周年を迎えた大阪大学が、阪大の源流としての懷徳堂を最新のマルチメディア技術によって顕彰したデジタルコンテンツである。江戸時代の学舎をコンピュータグラフィックスによってバーチャル空間に再現した「バーチャル懷徳堂」、貴重資料約百点を解説した「懷徳堂データベース」、高精細ハイビジョン作品「知

の光彩・未来へ」などがマルチメディアコンテンツ実行委員会によって制作され、平成十三年五月の記念式典で公開された。アトリウムではこれらを展示し、大阪大学文学研究科および懷徳堂センターのスタッフが実演解説を行った。

なお、懷徳堂関係デジタルコンテンツについては、その後も拡充作業が継続されており、平成十四年(二〇〇二)六月には懷徳堂文庫電子図書目録 <http://kaitokdo.jp/> が公開され、翌年には懷徳堂研究の基礎資料西村天因の『懷徳堂考』を電子化した「電子懷徳堂考」が制作された。また、「懷徳堂データベース」がその内容を大幅に拡充して、平成十五年末にインターネットで公開された。

「懷徳堂資料展」(大阪歴史博物館二階展示室)

歴史博物館二階展示室では、懷徳堂の一次資料三十点および貴重資料パネル十点が展示された。ここでは、文学研究科および(財)懷徳堂記念会関係者の協力を得て、展示解説を行った。

この資料展では、懷徳堂精神の魅力を三つの角度から紹介することとした。第一は、懷徳堂の学者を描いた人物像、あるいは学者が遺した書画などである。「中井竹山像」「中井履軒像」のほか、懷徳堂初代学主三宅石庵の「多言書幅」、初期懷徳堂の助教を務め、懷徳堂の学術的基礎を築いた五井蘭洲の「列庵先生書幅」、第二代学主中井楚庵の「墨菊図」、中井藍江筆、中井蕉園の「騎馬武者図」などがこれに該当する。

第二は、懷徳堂の運営に関わる資料。懷徳堂は大坂の有力町人によって運営された異色の学問所であった。現在の学則にあたる定書や定約、資金簿、建立記録などからは、懷徳堂の経営の実態が明らかになる。懷徳堂の

創建から幕府官許を得るまでの経緯を中井竹山が記した「学問所建立記録」、安永九年（一七八〇）から天明四年（一七八四）に至る五年間の義金積立と使途、貸付や利息などを記録した「懷徳堂義金簿」、貴賤・貧富を問わず学生は同輩であると規定した「宝曆八年十定」などがこれに当たる。

第三は、懷徳堂の学者たちによる研究成果。当時の主な学問であった経学（中国の儒教文献に関する研究）を中心に、文学、歴史、天文学、医学など、合理的な実証主義にもとづくさまざまな業績が光彩を放つ。享保十一年（一七二六）の三宅石庵の記念講義『論語』『孟子』の各首を筆記した『論孟首章講義』、萩生徂徠の『論語微』を批判した中井竹山の『非微』、中井竹山が時の老中松平定信に呈上した経世策『草茅危言』、中井履軒の医学書『越俎弄筆』ならびに木製天体模型「天図」などである。

この内、履軒の『越俎弄筆』は杉田玄白らによる『解体新書』完成の前年（安永二年、一七七三）に成書されたものであり、日本の医学史という観点からも注目される。また天図は、天動説と地動説とを折衷する宇宙観を表しており、その門下から地動説を唱えた山片蟠桃が出ていることも首肯できる。いずれも、いわゆる「漢学」の枠を遙かに越えるもので、懷徳堂の豊かな知的世界を示すものとして注目される。

なお、この展示には、総合学術博物館によって、ブースを解説した大型パネル四枚、および展示資料ごとの解説パネルが作製されることになり、筆者はその画像を準備し、文面を執筆した。その際、懷徳堂センター井上了氏、元懷徳堂記念会囑託研究員竹腰礼子氏の協力を得た。各パネルの文面（原文はいずれも横書き）は次の通りである。

大型パネル一「バーチャル適塾・懷徳堂」

（画像……適塾塾生データベース、懷徳堂CG玄閣部）

昭和六年（一九三二）に開学した大阪大学には、二つの源流があります。享保九年（一七二四）に大坂の有力町人によって設立された学問所・懷徳堂、そして、天保九年（一八三八）に蘭学者・緒方洪庵によって創設された適塾です。いずれも、大阪文化や日本の歴史に大きな役割を果たしました。平成十三年（二〇〇二）に創立七十周年を迎えた大阪大学では、この二つの源流を最新のマルチメディア技術によって顕彰する事業を行いました。それが、「バーチャル適塾・懷徳堂」です。それぞれの学舎をコンピュータグラフィックスによってバーチャル空間に再現し、塾生や貴重資料のデータベースを作成するとともに、高精細ハイビジョン作品「知の光彩・未来へ」を公開しました。「バーチャル適塾・懷徳堂」は、情報ネットワークの拠点であった両学舎の精神を継承し、世界に向けて積極的な情報発信を行い、知の交流拠点としての役割を果たして行きます。

大型パネル二「懷徳堂―浪華の学問所―」

（写真……懷徳堂旧址碑、文久三年大坂地図）

「懷徳堂」は、三宅石庵（一六六五―一七三〇）の学徳を慕う大坂の有力商人たち（五同志）によって、享保九年（一七二四）に設立された学問所です。享保十一年（一七二六）には幕府から「大坂学問所」として官許を受け、明治二年（一八六九）年の廃校まで約百四十年間、大坂における学問の中心として機能し続けました。懷徳堂は、幕府より官許を受け、租税免除などの特権も享受しましたが、基本的には「五同志」の出資および資産運用に依拠し、いわば「半官半民」の学問所として運営されました。

懐徳堂においては、学生は貴賤貧富を問わず同輩であるとされ、またその学問は朱子学を中心としつつも諸学の長所をも取り入れる柔軟なものでした。富永仲基・山片蟠桃・草間直方など、特徴ある町人学者が懐徳堂門下より輩出したことも注目されます。

大型パネル三「懐徳堂資料展の御案内」

懐徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年にわたって、近世日本の学術史と商道德の育成に大きな影響を与えてきました。その知的遺産は、(財)懐徳堂記念会を経て、現在、大阪大学の「懐徳堂文庫」に継承されています。この資料展では、自由で批判精神に充ちた懐徳堂の魅力を御紹介します。資料は、三つの性格に大別されます。第一は、懐徳堂の学者を描いた人物像、あるいは学者が遺した書画など。第二では、書や画といったリアルな資料から懐徳堂のイメージを体感することができます。第二は、懐徳堂の運営に関わる資料。懐徳堂は大坂の有力町人によって運営された異色の学問所でした。現在の学則にあたる定書や定約、義金簿、建立記録などからは、懐徳堂の経営の実態が明らかになります。第三は、懐徳堂の学者たちによる研究成果。当時の主な学問であった経学(けいがく)・中国の儒教文献に関する研究を中心に、文学、歴史、天文学、医学など、合理的な実証主義にもとづくさまざまな業績が光彩を放っています。

大型パネル四「(財)懐徳堂記念会のあゆみ」

(写真……重建懐徳堂)

懐徳堂が閉校して四十年を経たころ、大阪の文化遺産としての懐徳堂を再評価する気運が高まりました。このなかから生まれたのが、明治四三年

(一九一〇)に設立された懐徳堂記念会です。その発起人は西村天四ら著名な文化人や住友吉左右衛門ほか有力な経済人など、当時の大阪を代表する名士たちでした。記念会は大正五年(一九一六)に大阪府立博物館内(現在の中央区本町橋)に学校を建設し、一流の講師陣を招いて多彩な講義や講演を行うようになりまます。これらは誰でもがほとんど無料で聴講することができ、戦災で焼失するまでの三十年間、「市民の大学」として大阪の人びとに親しまれました。その運営経費は財界からの寄附に拠っており、今日のメセナ活動の先駆けといえます。記念会は第二次大戦後も大阪大学との協力の下、各種の講座や見学会などを催しており、現在も懐徳堂顕彰事業の中心的な役割を担っています。記念会の活動は、市民の自立性と学問の開放性という懐徳堂精神を近代に受け継いだものといえます。

展示資料解説パネル

各展示資料の解説パネルは次の通りである。

懐徳堂記録

中井竹山筆

中井竹山(懐徳堂第四代学主)が、懐徳堂の創建から焼失・再建に至るまでの経緯を漢文で記したものである。懐徳堂は、寛政四年(一七九二)の大火により焼失し、寛政八年(一七九六)に再建された。この再建に際して竹山は「懐徳堂記」を撰し、自ら木額に書き付けて講堂南側の壁面に掲げた。

懐徳堂幅

三宅石庵筆

三宅石庵が「懐徳堂」三字を大書した書幅。石庵は懐徳堂の初代学主。

彼の弟子たちが師の講場として設立したのが懷徳堂である。石庵は能書家としても世評が高かったが、本幅でも雄渾な筆致を見せている。この書は、初め額に仕立て、懷徳堂の講堂に掲げてあったという。

宋六君子図

薛閔月・中井藍江筆、頼春水賛

周敦頤・程頤・程頤・張載・司馬光・邵雍の六人の宋学者を描いた絵。賛は、朱子の賛を頼春水(頼山陽の父)が写したものだ。賛は寛政九年(一七九七)に書かれており、おそらくは前年の懷徳堂再建を祝って作成され、中井竹山(懷徳堂第四代学主)に贈られたものと思われる。

多言書幅

三宅石庵筆

三宅石庵の書幅。「黙坐して神(精神)を澄ます」とは、朱子学でいうところの静坐(厳肅な身体姿勢を保ち高度な意識集中に入る修養法)を指すと思われる。道教の坐忘や仏教の座禪から影響を受けたとせられがちなので、石庵はわざわざ「玄(道教)」「や」「禪」ではないと断っている。

列庵先生書幅

五井蘭州筆

列庵先生双幅と呼ばれる書軸のうち一。それぞれに六言詩が書かれている。列庵とは五井蘭州(懷徳堂助教)の別号。「岫雲の出るは意有るに非ず、機を忘るる鳥も亦た帰るを知る。話す莫かれ城中の旧事を、君と同じく是れ荷衣なり。」とある。

墨菊図

泉治筆、中井覺庵賛

菊を描いた墨絵。享保三年(一七一八)に泉治なる者が辞余に描いたものであるというが、筆者の泉治については不詳。泉治の没後、この絵が虫損によって失われるのを恐れた中井覺庵(懷徳堂第二代学主)が、寛保四年(一七四四)に軸装し、賛を書き入れたものである。

中井竹山像

中井藍江筆、中井竹山賛

中井竹山(懷徳堂第四代学主)の講義姿を描いた肖像画。寛政十年(一七九八)正月に懷徳堂内で書画の競作が催された際、中井藍江が描いたもの。竹山六十九歳の晩年の姿である。藍江は薛閔月の門人。竹山はかなりの肥満体であったと伝えられており、この肖像画もふっくらと丸みを帯びて描かれている。

中井履軒像

筆者未詳

中井履軒(竹山の弟)の肖像画。描線の状況から、下絵段階のものと考えられる。履軒の容貌は魁秀で、両眼も大きかったと伝えられているが、この肖像画はその特徴によく合致する。なお、本資料の上部には、履軒の墓誌銘(履軒の高弟であった三村崑山の撰)が貼付されている。

鴻池稻荷碑拓本

中井履軒筆

中井履軒(竹山の弟)が撰した碑文の拓本。履軒の弟子にあたる鴻池宗家の山中氏から、鴻池稻荷再建に際して碑文作成の依頼があり、天明四年(一

七八四)に作成された。鴻池家の発祥の地が伊丹であること、酒造業によつて家業の隆盛に至つた経緯などが詳細に記されている。

騎馬武者圖

中井藍江筆、中井蕉園賛

源義家が、後三年の役に際し、飛雁の乱れを見て伏兵を察知したという故事を描いたもの。義家は、大江匡房に兵学を学んだ。中井蕉園(竹山の子)の賛は、文武ともに通じた義家を賞賛するとともに、武技のみを偏重して兵学をおろそかにする当今の武士を嘆くものである。

出徳徳堂歌

並河寒泉筆

明治二年(一八六九)、並河寒泉(徳徳堂最後の教授)が麻枝となつた徳徳堂を去る際、門に貼り付けた和歌。「百余り四十路四とせのふみの宿けふを限りと見かへりていつ(百四十四年間続いた学舎も今日限りだと見返りながら出る)」。原本は門から剥がされて現存せず、後に同文を書いたものが軸装され伝えられている。

解師伐袁圖

岩崎象外筆、中井履軒賛

母親を猿(袁侯)に殺された蟹(解)が、臼(麻石)や牛糞(牛糞)など率いて仇討ちを行う場面を描いたもの。中井履軒(竹山の弟)による賛は、『春秋左氏伝』を模倣した格調高い文体で記されており、それがかえつて物語の滑稽味を増している。

学問所建立記録

中井竹山筆

徳徳堂の創建から幕府より官許を受けるまでの経緯を中井竹山が記録した文書。宝曆八年(一七五八)、中井梵庵(徳徳堂二代学主)が死去し、三宅春楼が学主に、竹山が学校預り人に就任した際に作成された。末尾には、創設以来の支援メンバーやその後継者らが証人として署名している。

徳徳堂定約付記

三宅春楼筆

宝曆八年(一七五八)に三宅春楼が学主に就任した際、従来の定約に付加された規約。内容としては、従来どおり「四書五経道義の書のみ」を購ずべきとしつつ、新たに「医術」「詩賦文章」を非公式に購すること認めるなどしており、徳徳堂における教授内容がやや柔軟となっていることがわかる。

徳徳堂義金簿

筆者不明、中井竹山書き入れ

安永九年(一七八〇)から天明四年(一七八四)に至る五年間の義金積立と使途、貸付や利息などを記録したもの。徳徳堂は、官許学問所として、敷地は幕府から提供されていたが、校舎の普請や運営については、支援者である商人たちが拠出する義金や、その運用利益によつて経費を捻出していた。

宝曆八年定 全三条

中井竹山筆

徳徳堂の学則にあたる「定書」は数点が現存するが、なかでも本資料は、

懷徳堂教育のありかたを示す代表的な規定である。第一条には「書生の交わりは、貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべきこと」と明記してあり、身分や財力を越えた学問の場での平等が謳われている。

安永七年六月定 全八条

中井竹山筆

懷徳堂内における書生の生活態度に関する規定。だらしない立ち居振る舞いや、無益な雑談・昼寝などは禁じられている。書生は話題や行儀に気を配り、学業に励むことが求められた。懷徳堂内の謹厳な空気をよく伝えており、書生たちはなかなか厳しい学生生活を送っていたように見える。

撰津国の名所旧跡を因入りで解説した書物。寛政十年（一七九八）から翌

秋里羅島編、竹原春朝斎ほか画

年にかけて刊行された。その第一巻には、含翠堂における伊藤東涯の講義の様子が描かれている。東涯は、伊藤仁斎の子で、懷徳堂の中井笠庵とも交友があった。おそらく懷徳堂でも、このような講義風景が繰り広げられたであろう。

論孟首章講義

三宅石庵口述

懷徳堂が官許を得たことを記念して、享保十一年（一七二六）十月五日に行われた記念講義の筆記録。『論語』『孟子』各々の冒頭章について講じたので、この名がある。過度の「利」を追求せんとする欲望を戒めつつ、仁義の結果として得られる「利」を肯定するなど、町人の学問所にふさわし

い内容である。

非微

中井竹山手稿本

中井竹山の主著。萩生徂徠の『論語微』を批判する著作。五井蘭州『非物篇』の続編として執筆され、天明四年（一七八四）には『非物篇』とあわせて懷徳堂から刊行された。本書は、『論語微』の脱を引用し、一つ一つ論駁している。既存の権威に屈することのない批判精神が見られるといえよう。

草茅危言

中井竹山手稿本

中井竹山の経世論。天明八年（一七八八）、大坂滞在中であつた松平定信は、竹山を召見し、政務について諮問した。これに応じて献上された意見が『草茅危言』であり、本資料はその草稿本と思われる。老中が市井の儒者に直接諮問するのは異例のことである。『草茅危言』は、後の「寛政の改革」にも多大な影響を与えたとされる。

史記臆題

履軒自筆書入本

中井履軒の『史記』注釈書。履軒は、多数の漢籍について精密な注釈を著したが、その大半は、本資料のように、和刻本の余白に自説などを書き入れ、訓点を改めるなどしたものである。本資料は、日本における『史記』注釈の最高峰として高く評価され、滝川亀太郎『史記会注考証』の藍本としても使用された。

中庸簡説

中井竹山筆

従来の『中庸』(朱子学の基本文献のひとつ)に錯簡(文章が間違つて前後していること)があるという、懷徳堂独自の学説を述べたもの。三宅石庵が提唱した説を中井竹山が補完した。その基本的な考えは、現代の中国思想研究においても承認され、受け継がれている。

越烟弄筆

中井履軒手稿本

中井履軒の著した医書。全十五葉にわたって人体解剖図が彩色筆写されている。履軒は自然科学にも強い関心を示し、友人の麻田剛立が獣体解剖および人体との対照確認を行おうとするのに立ち会ったという。本資料の成書は安永二年(一七七三)であり、杉田玄白らによる『解体新書』完成の前年であった。

天図(木製)

中井履軒手製

中井履軒が作成した回転式の天体模型。太陽を中心に水星・金星・地球・火星・木星・土星二十八宿(恒星系)が配置されており、太陽を中心とする太陽系の概念が導入されている。しかし回転板の支点は地球にあり、月および太陽は地球を中心に回転するようになっている。天動説と地動説との折衷的なものといえよう。

方図

中井履軒手製

中井履軒手製の宇宙構造図。地球の周囲に「月胞」「日胞」「星胞」「天」が

配置されている。注目されるのは、「天」の外に「是ヨリ外ハ我イマタ往タル事ナキ故シラズ」と記されている点である。「天」の外部を観測によって確認できない以上、安易に結論を出さず未詳のままとする誠実な学問的態度を窺える。

出定後語

富永仲基撰、延享二年(一七四五)刊本

仏教思想の歴史的展開を、「加上説」という仲基独自の理論(後発の学説は先行説より古い起源を自称するという説)によって批判したもの。仲基は三宅石庵の門人。仏教や神道を、信仰の対象ではなく客観的研究の対象とした点は、近世日本における独創的思想であるとして内藤湖南により顕彰された。

「大阪府学教授」印

中井竹山の印章。竹山は懷徳堂を名実ともに幕府公認の官学とすべく尽力した。その志向がよく窺われる印章である。篆刻は前川虚舟による。

「水鏡」印

中井履軒の印章。玻璃製。「水鏡」は『孟子』から採った言葉で、履軒の私塾の名でもある。

(上記二印のキャプションで1枚のパネル)

古今通

書写者未詳

五井蘭州による『古今和歌集』注釈。宝暦二(一七五二)〜四年(一七五四)頃の成立。文芸は政治教化に役立つものだ、という儒教的な文学観から、従来は男女の恋歌だと解されてきた歌についても、これは恋愛に仮託したも

のにすぎないとして、その中から人倫や教戒の「真情」を読み取るなどの特徴がある。

勢語通

五井蘭州手稿本

五井蘭州による『伊勢物語』注釈。宝暦元年(一七五一)成立。『伊勢物語』を、在原業平の手に出る史実と、後人の手に出る虚構とに大別する。また自序には、これを我家の『伊勢物語』として一人娘に読ませるとあり、教育に有益な独自の『伊勢物語』を志向している。単なる注釈をこえた著作だといえよう。

かはしまものかたり

加藤景範著、中井履軒序、中井竹山跋、岩崎象外画

山城国葛野郡川島村の人、儀兵衛の行状を和文で記したものの。明和八年(一七七二)懐徳堂蔵版。儀兵衛は養母に孝養を尽くしたことにより「孝子」として幕府より表彰された。川島村は、竹山の妻の実家(平嶋家)の所在地で、竹山は『孝子儀兵衛記録』を著すなど、積極的な顕彰運動を展開した。

木司令

中井蕉園筆

懐徳堂にて用いられていた複製の柀(ひょうしぎ)。授業の開始時刻を告げる合図として用いられた。裏面には「一令で悟り、再令で願み、三令で聚まり、箭を執つて馳せよ」と記されており、三度に分けて打ち鳴らして、学生たちに徐々に準備を促したものらしい。表面には木槌の痕が残る。

展示状況

これらの資料の展示状況は次頁の通りである。

なお、一階アトリウム、二階展示室において運営・解説を担当したのは、筆者の他、次の方々である。田辺敏子(懐徳堂記念会事務局主事)・竹腰礼子(懐徳堂記念会元囑託研究員)・豊田二郎(大阪大学総合学術博物館助教授)・井上了(文学研究科懐徳堂センター職員)・佐野大介(文学研究科中国哲学研究室助手)・池田光子・前川正名・黒田秀教・上野洋子・志村安智・松田祐樹(以上、中国哲学研究室学生)・大村由紀子(文学研究科中国文学研究室修了生)

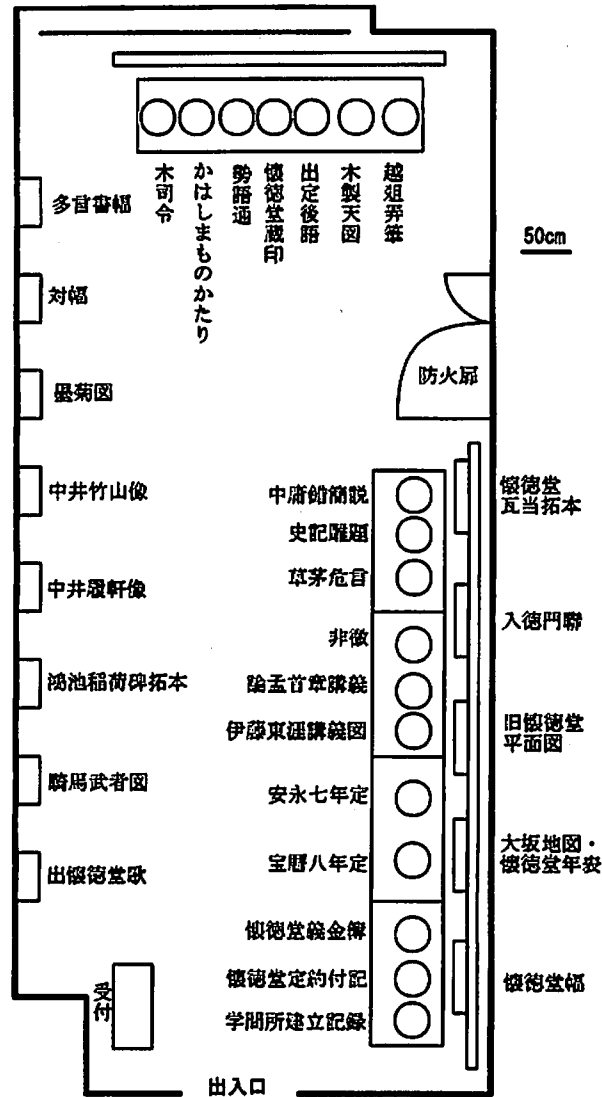
九日間の展示を終えて、スタッフによる反省会が開かれた。同時に二箇所での展示解説を並行して進めるということで当初から様々な課題が懸念されたが、期間中の混乱は特になかった。しかし、改めて次のような問題点・反省点も指摘された。これらの諸点については、今後、同様の展示の際には留意し、改善に努めていきたい。

設備・環境

・一階アトリウムは、基本的にはオープンスペースである。そのため、「バーチャル懐徳堂」の音量の不足が感じられた。午前中のテスト(周囲の人数が少ない時間帯)では良くても、午後に来場者が増え周囲の雑音が増えると、後ろの席までスピーカーの音が届かなかった。音声をディスプレイとは別系統にし、アンプ&スピーカーシステムを設置すべきであった。

・また、DVDプレイヤーが受付裏の箱の中に収納されていたため、赤外線リモコンによる操作が困難であった。

大阪大学総合学術博物館設立記念展 展示状況 (大阪歴史博物館二階展示室)



・二階展示室は、本来、大阪歴史博物館の会議室とのことであった。そのため、展示室としては天井が低く、「中井竹山像」など長い軸物の展示という点では、視覚的にやや閉塞感があった。また、空調や遮光の設備が不十分であった。

・計画当初は、本展示室(会議室)防火扉の前にパーテーションを配置できるという説明であったが、後から、防災担当者から配置できないとの指示があり、展示物を減らさざるを得なかった。

・また、貴重資料パネルを直接部屋の壁面に掲示できなかったため、業者

がパーテーション(レンタル)を準備したが、そこに汚れが目立ち、貴重資料パネルを掲示する背景としては極めて劣悪であった。

設営・撤収

・運送業者による徳徳堂資料の扱いが、意外に手荒だった。

・また、最終日の撤収では、展示終了十六時、十七時までに梱包終了の予定であったが、定刻を大幅に遅れて業者が到着(十七時に現地着、梱包開始)したため、撤収作業に手間取り、大阪歴史博物館側に御迷惑をか

けた。

・なお、資料の搬入・設営・撤収等の日程は次の通りであった。十月十日、大阪大学より資料・機材を搬出(業者による移送)、十一日、現地へ搬入(スタッフによる設営)。展示会最終日の二十日、展示終了後に直ちに現地で梱包・搬出(業者による移送)、二十一日に大阪大学で荷開き。

担当者(他ブースの関係)

・一階アトリウムでは計二十二のブースが展示解説を行ったが、他ブースの説明担当者が常駐していない場合があり、懷徳堂担当者が他ブースの説明を求められるという混乱があった。これは、懷徳堂ブースが会場中央に大きなスペースで配置されていたことにもよると思われるが、ブース担当者の管理意識、および担当者同士の連絡を明確にしておく必要がある。

解説・対応

・二階の展示場所が一階のアトリウムと離れていたため、歴博見学のついでに「懷徳堂資料展」を閲覧した来場者には展覽会の趣旨が伝わりにくかった。

・展示解説は、来場者からの質問があれば答えるという方針であったが、入室後、短時間で退室する見学者も多く、定期的に簡単な解説または講演をするなどの方法を取り入れても良かった。

資料の劣化

・今回久々に「懷徳堂幅」を学外展示したが、その表装の劣化が著しいこ

とが判明した。懷徳堂資料の中には、修復しないと今後の展示に耐えないものがある。

・最終日の撤収の際、「安永七年定」の表装(金箔貼の部分)に見慣れない小さな破れが発見された。梱包・運送によるものか、展示中に生じたものか、未詳である。これらを含め、改めて調査を進めたところ、緊急に修復を必要とするものは次の通りである。

・目安として緊急度をA・B・Cの三ランクに区分した。Aは、このままでは資料の劣化が加速する恐れがあるので至急修復を要し、また修復しなければ今後公開はできないもの。Bは、このままでは公開にやや支障があり、また、木箱に入れるなどの保管状態を改善しなければ今後資料の劣化が進むもの。Cは、現時点では公開自体は可能であるものの、額装する、または木箱に入れるなどの保管状態を改善しなければ今後資料の劣化が進むと懸念されるもの。

【緊急度A】

- ① 懷徳堂幅 一幅 表装の劣化による裂け目
- ② 中井竹山画像 一幅 紙折れ
- ③ 入徳門聯 一对 乾燥によるひび割れ、補修時のガムテープ付着
- ④ 螺鈿算盤 一挺 軸・駒の脱離
- ⑤ 白鹿洞書院揭示(捲り) 一枚 乾燥によるひび割れ、要額装
- ⑥ 加藤竹里書簡集 二帖 虫損甚大
- ⑦ 懷徳堂記念会設立趣意書 一面 用紙劣化による剥落甚大
- ⑧ 蘭洲先生真跡 一帖 折り目裂け、要書帙
- ⑨ 懷徳堂印(大阪府学教授印) 一顆 印柄脱離

⑩ 李斯釋山碑 一帖 折り目裂け、虫損甚大、要書帙

⑪ 背貝印匣 一匣 乾燥による漆のひび割れ、貝の剥落

⑫ 萬年先生緩歩帖 一帖 折り目裂け、要書帙

⑬ 襄陽帖 一帖 表紙脱離、要書帙

⑭ 道澄寺鐘銘 一帖 表紙脱離、折れ目裂け、虫損甚大、要書帙

⑮ 文爾先生碑 一帖 表紙布剥離、折れ目裂け、虫損甚大、要書帙

【緊急度B】

⑯ 朱文公大字行書四訓版 四面 湿度変化による反り・歪み、要木箱

⑰ 伝中井履軒書屏風 半双 本紙の劣化による裂け目・剥離、要木箱

【緊急度C】

⑱ 竹山先生背誦(捲り) 四十八枚 要額装

⑲ 石庵・蘭洲二先生張交屏風 四曲一双 要木箱

⑳ 竹山履軒諸先生張交屏風 二曲半双 要木箱

なお、ここには具体的書名を逐一列挙はしないが、貴重書籍の内、無駄のものについては、当然「要書帙」「緊急度C」となる。大阪大学全体の取り組みとして、計画的にこれらの修復が進められることを要望したい。

おわりに

以上、本稿では、展示室を飛び出した懐徳堂センターの活動について報告してきた。これらの活動を通じて改めて痛感されたのは、「公開」「体験」を前提とした「調査・研究」「保存・整理」の重要性である。

これまで、大学の附属図書館や資料室は、情報を提供したいが資料はできるだけ良好に保存しておきたい、という矛盾に悩んでいたと言える。その結果、貴重資料については、どちらかと言えば「保存」の方に重点が置かれ、「公開」については、あまり積極的に取り組んでこなかった。

この二律背反を解消する切り札として登場したのが、「電子図書館化」構想であり、その優れた成果の一つが懐徳堂デジタルコンテンツである。大阪大学の場合は、偶然にも、電子化事業が本格化した平成十二年(二〇〇〇)に附属図書館新館が竣工し、翌年、旧館書庫から新館貴重図書室へと懐徳堂文庫の総合移転が行われた。また、平成十三年(二〇〇一)には、大阪大学創立七十周年記念事業の一環として「パーチャル懐徳堂」が制作され、さらに、平成十四年(二〇〇二)には、文学研究科懐徳堂センターにおいて関係コンテンツの常設展示が始まった。

そして、こうした電子化事業を推進する中で、一次資料自体の保存・整理がいかに重要であるかが再認識されたのである。電子情報としての「公開」を前提として、懐徳堂文庫の「調査・研究」「保存・整理」は急速に進展した。そしてまた、その調査・研究の成果が新たな電子情報として整備され、さらに拡充されたコンテンツとして公開されたのである。

平成十五年末には、これまでの懐徳堂デジタルコンテンツを集大成した「WEB懐徳堂」(<http://kaitokudo.jp/>)がインターネットで公開された。懐徳堂センターの活動も、次なる飛躍の段階に入ったと言える。

(本学文学研究科教授、懐徳堂センター専門委員)